三翠会館にて　（写真左から）伊藤彰男、丹保健一、山田康彦、豊田長康、井口 靖、森 俊一

◎特集／学長・学部長・副学部長座談会

育む2

文系2研究科の取り組み

三重大学の地域貢献をリードする文系大学院の教育

大学院教育の実質化が求められる今、
三重大学の文系大学院においても教育改革が課題となっています。
今回は学長と人文学部並びに教育学部の学部長、副学部長が集まり、
大学院教育のあり方や将来展望について語り合いました。

学長
豊田長康

副学長
山田康彦

人文学部
井口 靖

人文学部
森 俊一

教育学部
丹保健一

教育学部
伊藤彰男

高度専門職業人の養成に向けた文系2研究科の取り組み

司会　本日はお集まりいただきありがとうございます。大学院教育の実質化に向け、文系2研究科も努力されているところだと思いますが、まず大学院教育の理念・目的についてお聞かせください。

井口　人文社会科学研究科には地域文化論専攻と社会科学専攻がございます。従来の大学院と違うのは、既存の学問の枠を超えた学際的、総合的な面も兼ね備えている点です。これにより複雑化、多様化する現代社会に柔軟に対応できる研究者、あるいは高度専門職業人を育成したいと考えています。

丹保　教育学研究科は3専攻に分かれており、学校教育専攻は学校教育専修、障害児教育専攻は障害児教育専修、教科教育専攻は国語、社会など教科ごとの専修を形成しています。学生だけではなく、三重県と連携し現職教員のリカレント教育(※1)も対象に、現場の課題を改善できる高度な教育を担う教員養成を目指しています。

豊田　三重大学の文系大学院の主眼は、地域社会へ貢献できる高度専門職業人の育成であると思います。地域圏大学としてより実学的な方向に進むことは、地域から支持され期待される大学としての発展につながるはずです。

司会　育む人材のイメージや留学生の状況、地域ニーズへの対応についてはいかがですか。

井口　人文社会科学研究科は一般選抜の他、社会人特別選抜、外国人留学生特別選抜を行い、有職者向けの昼夜開講、短期在学コース、長期履修学生制度を設けています。一般の学生については高度専門職業人の養成が目標です。社会人については、地域文化論専攻では地域全体の教養の向上を目指し、社会科学専攻では社会人の再教育、実際の社会に役立つ知識の修得を支援しています。

森　人文社会科学研究科の大きな特長は社会人向けの昼夜開講制で、県庁や市役所、企業の方など地域の方が来られています。地域文化論専攻も社会科学専攻も、社会人を受け入れて再教育する面で、地域貢献への志向を持っています。

丹保　教育学研究科の対象は、既に教員免許を取得された方で、大学院ではその上のレベルの専修免許が取得できます。また、専修免許を取得できる単位制の公開講座を開くなど、現職の先生も含め三重県全体を底上げできるリーダー育成を進めています。留学生については質の保証のため徐々に敷居を高くする一方で、天津師範大学や河南師範大学などと連携して優秀な学生の確保に努める他、三重県や四日市市とも連携しています。留学生にとって問題の一つである宿舎については、幸い全学的に宿舎確保の方針が決まりました。DD（ダブルディグリー）制度の導入および受け入れ留学生に対する宿舎の確保は、全国的にもまれですので三重大学が先頭を切ればインパクトは強いと思います。

伊藤　私は今後の研究者は大学教員や研究機関の研究員のイメージだけではなく、実践的な研究者というイメージで展開を図ることがますます必要になる気がします。三重県は南北に長く、地域の抱えている課題も全く違うわけです。そのため高度職業人養成という側面と同時に、課題を一緒に解決し得る実践的な研究者という側面から、地域のニーズを再把握することも必要でしょう。

山田　人文社会科学研究科でも教育学研究科でも、高度専門職業人の養成が目的ということですが、それにふさわしい大学院の制度が整っているかどうか、教育研究のあり方が目的にかなっているかどうかを検討していかなければいけないと思っています。まだ日本の大学院は、高度専門職業人を育成する教育研究プログラムを開発しきれていないというのが現状です。本当に実践的な研究者を養成する新しい教育と

研究のあり方を研究して、ニーズに応える中身を作っていかなければなりません。

豊田　やはり高度専門職業人といっても、教えられた知識と技術をそのまま実施するだけの人材ではいけないのであって、現場の問題点を自ら発見・解決して、新しいことを創造するのが本当のプロフェッショナルだと思います。結局、三重大学の教育が地域社会において評価されるのは、三重大学の卒業生が非常に優秀な人材であると評価されるかどうか、つまりアウトカムによってです。ですから、優秀な人材に入学してもらい付加価値を加え、社会に評価される人材を送り出すことが大事だと思います。

実質化、国際標準を見据えた教育カリキュラムの構築

司会　大学院教育と研究のバランスや、教育の国際標準との合致についてはいかがですか。

井口　ひとつの試みとして、「三重の文化と社会」という授業では、自分の専門分野に根ざしつつ、三重の地域の問題を発見・解決し、その成果を地元に発表するということを行っています。教員の研究と教育をうまく組み合わせながら進めることで、問題発見・解決できる人材を地域に戻していけるのではないかと思います。また、標準化については国立大学法人17大学人文系学部長会議で、相互評価のシステムを作ったらどうかという話が進んでいます。

森　高度専門職業人として自立していくには、狭い専門領域だけに知識が偏っては困るわけです。そこで社会科学専攻では、行政や企業活動に携わるような人材養成を念頭に、法・政・経を融合した地域行政政策専修と、民事関係の法律や経営学を一緒にした地域経営法務専修を設けています。行政機関や企業に勤めながら、日常的に直面する問題に右往左往するのではなく、全体を捉えて指針を見出し、仕事や実践活動で応用できる手がかりや理屈を大学院で学んでもらう。それが大学院教育ではないかと思います。

丹保　研究と教育の兼ね合いでは、私は学生が修士論文で自分の研究を進めていくことは、全く問題ないと思うんです。むしろ教育学部の学生が自信を持って現場に出るためにも、得意分野、研究コアを持った学生を育てなければいけないわけです。また、実質化、国際標準化については、教育大学協会で認証評価の問題を議論しています。

伊藤　やはり、既存の研究者を養成するドクターコースの問題が影響していると思います。それは限りなく細分化を追求しているわけで、今後は専門科目を開講するだけではなく、それぞれの学問領域の問題にコミットする授業科目も含めたカリキュラム編成をしなければなりません。また、人文と教育の持ち味を合わせて、三重県の地域課題に応えられるような新しい大学院を検討したり、後輩の育成を担う人材を文系も育てる必要があるのではないでしょうか。

豊田　実際の研究は狭い範囲であっても、学生にはそれをさまざまな問題解決に応用できる力を身につけさせることが大切です。そのための教育カリキュラムの工夫がぜひとも必要であろうかと思います。もちろん、ただ現場に放りこむのではなく基礎的な理論も絶対に必要です。現場の中で問題点を見つけて、それに必要な基礎理論などを学ぶ現場密着型PBL(※2)などの手法を、大学院実質化に向けて考えなければなりませんね。

山田　従来の専門性を押さえていく筋と、実践性、総合性の筋を用意し、それぞれが融合的な形になっていくカリキュラムが求められていると思います。それを踏まえながら国際標準を考えるときに、例えばJABEE(※3)の学習・教育目標を見ると、特殊な知識や技術ではなく、非常に原理的であり総合的な能力が示されているわけです。これらを文系大学院に置き換えて考えていくことが必要で、それが実質化や国際標準につながっていくのではないでしょうか。

文系大学院の価値を訴え、教育能力重視の教員採用も

司会　学部教育と大学院教育のつながりについて、お考えをお聞かせください。

井口　人文学部ですと大学院を前提とするわけにはいかず、学部教育で完結する形を考えざるを得ないところはあります。やはり文系の場合、就職の問題が大きく、大学院で2年間さらに教育しているわけですから、企業でもその点をご理解いただき門戸を開いていただくようになると、私たちも学部、大学院一貫した教育ができて、社会に送り出せるのではないかと思っています。

森　私は社会人の再教育を軌道に乗せたいと考えています。企業人、公務員、市民の再教育の場として人文社会科学研究科を地域社会から位置づけていただければ、これが地域貢献の最大のものになるとも思っています。ですから、大学院と学部が連続してあるというより、一旦区切りがあっても、大学院が社会人教育の中心になれば良いと考えています。

丹保　教育学研究科では現職教員のリカレント教育を行っていますし、学部生については教職に関連する専門的な知識を深める指導をしていますが、まだ一貫的な制度にはなっていないですね。

伊藤　教育学部の場合、大学院を出ると教員免許が専修免許にレベルアップされます。だからこそ学部教育が不充分なままで、それを大学院まで延長することということでは何にもなりません。

山田　文系大学院の就職の問題は、やはり大学院に行くメリットが社会的に明確ではなく、そのメリットをはっきりさせていくことが必要です。高度専門職業人の養成が目的であれば、専門職大学院的な性格を持った大学院を確立していく。いわゆる研究者養成で行われる研究とは違い、研究者自身がより実践的な研究ができたり、それに応用できるような原理的、総合的な研究ができる環境も用意されなくてはいけないと思います。

司会　教員確保の方針や選考ポイントについてはいかがでしょうか。

井口　人文学部では、これまで主に研究能力、業績や研究論文中心に選考してきましたが、現在は採用時に教育面での抱負を教育研究計画書に記述してもらい、それも選考資料にしています。また、検討段階ではありますが、担当予定の授業のシラバスを出してもらう、模擬授業をしてもらうなど、教育の実践能力を見て採用する方針も考えています。

森　また、任期付きの教員も採用しています。アカデミックな世界だけで研究をしてきた人間ではなくて、厚生労働省で政策立案経験のある人など現場のことをよく知っていらっしゃるような人もスタッフに加え、学生の指導や教育にあたろうとしているのが特長ではないでしょうか。

丹保　やはり大学教授においても研究能力だけあって、人間としてどうかという人は、研究者、教育者以前の問題です。教育学部では、各専攻で常識や人間性などいろいろな項目をチェックできるよう、面接や情報収集して判断しています。また、学生の満足度同様、職員の満足度も上げていくということが、優秀な人材確保につながり教育の質も上がっていくと思っています。

伊藤　これからの教員に求められる最大の力は、管理運営能力です。研究や教育をやっていればいいという気持ちでは、今後は対処できません。この管理運営能力は大学内で必要なだけではなく、共同研究を行う場合にも同じように必要だと思います。

豊田　両学部・研究科とも研究能力や研究実績だけの評価ではなく、教育の評価をしようとして努力されているわけですね。人格面の評価は大変難しいですが大切なことですので、選考方法の工夫をしていくべきだと感じました。また、学生満足度や教職員満足度を高め、三重大学を魅力に感じるような取り組みも進めたいと思います。

文理融合型大学院、大学教育GPへの挑戦

司会　では最後に、文系大学院の将来展望をお聞かせください。

井口　先ほどお話しした「三重の文化と社会」は全国的にも非常にユニークな試みであり、特色GP(※4)の対象となり得ると自信を持っています。地域に根ざすもので今後の発展性も見込めますし、PBL的要素が非常に強く、ぜひともGPに挑戦したいと思っています。

丹保　教育学研究科では、教職大学院を目指す前提として大学院の教員養成GP(※5)を取ろうと大学院改革を進め、その一環として2年間の現場実習を単位化しようと考えているところです。また、今年は地域連携という形で現代GP(※6)をいただき、附属の他、地域の中学校や小学校、幼稚園と連携して、地域の活性化と人材育成という2面から連携をしようと進めています。今後は国際交流での現代GPも考えています。

司会　人文と教育が一つになった、文系の新しい大学院の展望についてはいかがでしょうか。

伊藤　三重大学が重点を置くべきなのは、やはりアジア地域ではないでしょうか。アジア地域に関する日本の一大拠点へと三重大学が発展するために、その中核を担える人材を養成する大学院を考えていくことはできないかと思っています。そこには語学、経済といろんな問題が絡んできますので、既存の学問領域ではなしに、人文、教育、理系も組み入れた形で、課題に対応したチームを編成しつつ大学院を構成できればと考えています。

森　文理融合で実績もあって実現しやすいのは、環境をキーワードにしたものかと思います。環境政策や環境教育は文系ですし、環境技術や土壌の改善、あるいはエネルギー改革などは生物資源学部や工学部の専門領域です。また、公害による疾病や公衆衛生全般については医学部の専門領域なので、環境をキーワードにすると文理融合型大学院は構想しやすいと思います。

豊田　人文・教育共通の大学院をというご意見については、まだ今日の段階では結論は出ませんが、やはり文系が中心となった将来構想を真剣に検討すべきではないかと思っています。法人化されて2年半たち、国立大学の存在意義は何か、特に地方大学の存在意義は何かと問われています。それはいかに地域貢献できるかということですが、皆さんのご意見をうかがって、大学院のあり方によって今まで以上に地域に貢献できるということを確信させてもらった次第です。三重大学の持てる力を発揮して地域に貢献し、さらにその機能を大きくしていきたいと思います。

司会　本日はありがとうございました。

(※1) リカレント教育
職業能力の向上や人間性を豊かにするための社会人の再教育。

(※2) PBL
PBLチュートリアル教育。学生が少人数で自主的に取り組む問題発見解決型教育・学習

(※3) JABEE(日本技術者教育認定機構)
世界に通用する技術者を育てるために
技術系教育カリキュラムの審査・認定を行う機構

(※4) 特色GP
文部科学省の特色ある大学教育支援プログラム。
大学教育の改善に資する種々の取組のうち、
特色ある優れたものに財政支援を行う。

(※5) 教員養成GP
文部科学省の大学・大学院における教員養成プログラム。
資質の高い教員を養成するための特色ある優れた
教育プロジェクトに重点的な財政支援を行う。

(※6) 現代GP
文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラム。
社会的要請の強い政策課題に対応した、特に優れた
教育プロジェクトに財政支援を行う。平成18年度、本学の
「教育実践力の育成と学校・地域の活性化」が採択された。

(GP：グッドプラクティス)

プロフィール

豊田長康 とよだながやす
学長　医学博士
1950年生まれ
専門分野は、産科婦人科学・周産期医学・生殖内分泌代謝学

山田康彦 やまだやすひこ
理事・副学長(教育担当)　教育学修士
1954年生まれ
専門分野は、美術・芸術教育学

井口 靖 いのくちやすし
人文学部長　文学修士
1955年生まれ
専門分野は、ドイツ語学・言語学

丹保健一 たんぽけんいち
教育学部長　文学修士
1948年生まれ
専門分野は、国語学

森 俊一 もりしゅんいち
人文学部副学部長　経済学修士
1949年生まれ
専門分野は、財政学

伊藤彰男 いとうあきお
教育学部副学部長　教育学修士
1943年生まれ
専門分野は、教育学

◎司会・進行
森野捷輔 もりのしょうすけ
理事・副学長(研究担当)　工学博士
1942年生まれ
専門分野は、建築構造学